

## <研究ノート>

# サンデルの経済学批判における腐敗の概念について

## —マルクスの疎外概念との比較—

山口 拓 美

### はじめに

マイケル・サンデルは、『それをお金で買いますか』の中で、また『これからの「正義」の話をしよう』においても少なからず、経済学の過度に市場主義的な見解を「fairness 公正, 公平」と「corruption 腐敗」の2つの観点から批判している。サンデルの経済学批判は、近年、経済学が伝統的な対象領域を越えて生活のあらゆる領域に進出してきたことを受けて行われたものだが、そこで用いられている批判のための用語が持つ意味の広がり、マルクスが1840年代の諸著作で使用した用語、「Exploitation 搾取, 利用, 剥削」および「Entfremdung 疎外」の意味内容と多くの部分で重なり合っている<sup>1</sup>。もちろん、19世紀半ばから今日に至るまでの間に経済社会も経済学も大きく変化してきたのであるから、それに応じて経済学批判のための概念にも何らかの変化が生じたり新しい要素が付加されたりしているはずである。本稿では、主にサンデルの「腐敗」の概念に焦点を当て、これとマルクスの「疎外」の概念とを比較し、両者の共通点と相違点を考察する。

マルクスの思想とコミュニタリアニズムを比較検討した著作として、青木（2008）、松井（2012）がある。疎外論については、前者はリベラリズムとの共通性を指摘することでこれを否定的に、後者は肯定的に評価しているが、両者ともサンデルの「腐敗」の概念については言及していない。本稿では、社会経済的事象としての「腐敗」の意味をサンデルの議論に即して理解した上で、この概念が経済学批判のための装置として、どのような文脈でどの程度有効なのか、その意義と限界とを検討する。

## 1. 公正, 強制, エクスプロイテーション

サンデルは『それをお金で買いますか』の中で、グレゴリー・マンキュー、ゲイリー・ベッ

---

1 Exploitation は、特に、1845-46年の『ドイツ・イデオロギー』の中の「聖マックス」に、Entfremdung は1844年の『経済学・哲学草稿』に頻出する。

カー、ケネス・アロー等の経済学者の見解を、チケット転売、移民権の販売、血液の売買等の事例に即して批判している。その際、批判の観点は2つあり、第一の観点は取引の公正さに関わるものである。例えば、血液の売買が行われる場合、社会に経済的不平等があるかぎり、売り手となるのは貧困層であって、合意による取引であるとはいっても純粋な自由意志による選択とはいえず、事実上は強制的な取引になっている、というものである。こうした事態は、マルクスが用いた用語で表現すればエクスプロイテーション Exploitation (搾取、利用、剥削)<sup>2</sup>であって、実際、サンデル (2014) も社会学者のティトマスの議論を紹介する形で「血液の市場は貧しい人々を食い物にする a market in blood exploits the poor」(179) と述べており、ティトマスの「大量血液供給者という新たな被搾取 exploited 階級が出現しつつある」(180) という文を引用している。経済的不平等を前提とした一方による他方の利用を一言で表す語は、エクスプロイテーションである。

多くの経済学者は臓器市場の自由化に賛成であり、したがって貧者のエクスプロイテーションを推進する立場にある。マンキューは日本でも非常によく使用されてきた経済学の教科書の中で次のように述べている。

もし、腎臓が必要な人たちが、二つ腎臓を持つ人から一つを買うことができたなら、価格は需要と供給が均衡するように上昇するだろう。腎臓市場が自由化されれば、売り手側は新たな現金を手にすることができ、買い手は自分の命を救う臓器を買うことができるため、両者ともよりよい暮らしが送れるだろう。そして、腎臓の供給不足も解消されるだろう。

このような市場が存在することは効率的な資源配分につながるが、公平性を懸念する声もある。すなわち、臓器市場が自由化されると、臓器を最も欲し、かつ支払能力のある人から順に臓器が配分されるので、貧しい人の犠牲の上に裕福な人が恩恵を受けるという主張である。しかし、現在のシステムもまた公平 fairness といえるのだろうか。機能する腎臓を一つも手に入れることができずに死んでいく人々がいる一方で、ほとんどの人は絶対に必要なわけではない余分な臓器を持って生活している。これで公平といえるだろうか。(マンキュー 2014, 203)

サンデルは腎臓売買に度々言及しているにもかかわらず、著書の中でこのマンキューの主張を取り上げることはしていない。しかしマンキューのこの一節には、現代の主流派経済学の立場が極めて明瞭に表れているため、本稿の見地からは重要である。すなわち、ここでは「貧しい人の犠牲」を根拠とする臓器売買批判に反論する形で「公平」が持ち出されており、裕福な人が死ぬ

---

2 Exploitation は多くの場合「搾取」と訳されるが、文脈に応じて「利用」「開発」等の訳語も使用されており、動詞形の場合「食い物にする」と訳されることも多い。中国語訳では主に「剥削」が使われる。訳し分けによる混乱を避けるためにはエクスプロイテーションとカタカナ表記するのがよいと思われるので、本稿では主にこの語を使用する。

一方で貧しい人が「余分な臓器を持って」生き続けるのは「公平」とはいえないと主張されている。このように「裕福な人」の利益を擁護する立場は、「ブルジョワ経済学」というマルクスの用語を想起させるものである。富者の利益の優先という立場に関する限り、主流派経済学の基本性格は不変であり、これに対する批判としてはエクスプロイトーションの語が今でも批判語として有効に機能するといえる。

しかしながら、サンデルによれば、公平・公正の観点からの批判はカントやロールズに連なるリベラリズムの立場からの批判であり、この観点はサンデル自身の立場から強く主張されるものではない。サンデル自身は自由や合意を最重要視するリベラリズムに批判的であって、彼独自の経済学批判は「腐敗」の概念によってより多く行われている。

## 2. 腐敗と疎外

サンデルによれば、腐敗 corruption は公務員や政治家に係る贈収賄に止まるものではなく、より広い意味を持っている。すなわち「ある善、活動、社会的慣行が腐敗するのは、われわれがそれを扱うのにふさわしい規範よりも低級な規範にしたがうとき」（サンデル 2014, 72）であり、そうすることによって、われわれは「それを貶め、卑しめている」（73）ことになる。つまり「ある善 a good」の価値を「誤った方法で評価する」（24）なら、それは腐敗なのである。

この観点からすれば、前項で見た腎臓売買は、売り手と買い手との間に何の不平等も強制も偽装もなかったとしても、したがって完全に公平公正に行われたものだとしても、やはり否定されることになる。なぜなら、腎臓を売買の対象にした時点で、売り手と買い手は不適切な規範に従い、人間の肉体の価値を誤った方法で評価しているからである。すなわち「人間を予備部品の集まりとみなし、人間を侮辱し、物質視」（サンデル 2014, 162）しているのである。

こうした事態は、マルクスが用いた用語で言い換えるならば、人間の「疎外 Entfremdung, alienation」ということになる。実際、サンデルの著書にも「腐敗」の文脈でこの語が現れる箇所がある。それは代理出産の腐敗性を論じる部分であり、そこでは、代理出産は「出産を一種の疎外された労働 alienated labor に変えてしまう」「彼女の出産は疎外されている is alienated」（サンデル 2011b, 159）というエリザベス・アンダーソンの文が引用されている。管見によれば、ここに「疎外された労働」というマルクスの用語が出現するのは偶然ではない。

サンデルの腐敗論とマルクスの疎外論には思想史的な共通性がある。すなわち、両者ともアリストテレス由来の目的論ないし本質主義の立場からの立論である、というのがそれである。サンデルのアリストテレス主義は言うまでもないことであるが、マルクスの疎外論も、「人間的な諸機能」（マルクス 1964, 92-93）という用語の使用に最もよく示されているように、アリストテレスの本質主義に基づいているということは多くの論者によってかねてより指摘されてきたところである<sup>3</sup>。

アリストテレスの存在論は、個物を起動因、目的因、形相因、質料因の4つの原因によって分

析するものであるが、最初の3つの原因はしばしば1つにまとめられ、形相あるいは目的あるいは本質という語で代表される。自然物の成長はそれに内在する目的の実現過程であって、目的ないし本質の実現がその自然物にとっての善である。次の「疎外された労働」からの一節には、このアリストテレス的目的論ないし本質主義の性格がよく表れている。

労働が労働者にとって外的であること、すなわち、労働が労働者の本質に属していないこと、そのため彼は自分の労働において肯定されないでかえって否定され、幸福と感ぜずにかえって不幸と感じ、自由な肉体的および精神的エネルギーがまったく発展させられずに、かえって彼の肉体は消耗し、彼の精神は頽廃化する、ということにある。(マルクス 1964, 91)

賃労働者が行う労働の目的は使用者によって外から与えられた外的目的であって内的なものではなく、しかもその労働は長時間の単純作業であり、労働者の人間的機能の発達に寄与するどころかむしろそれを阻害する。このような認識は、アリストテレスが『政治学』で行った単純労働の評価と同一の趣旨のものであるといえる。こうした賃労働についての認識に基づいて、マルクスは賃金制度の廃止を主張した<sup>4</sup>。賃金制度は人間の取り扱いとして不適切なのである。

賃労働の廃止は、一見するところ、共産主義に特有の極端な主張であるかのように見える。しかし、19世紀においては、この主張は必ずしも特殊な過激思想というわけではなかった。サンデルによれば、賃労働の否定は19世紀のアメリカでも多くの論者に共有されていた優勢な主張であった。

19世紀前半までのアメリカでは、賃労働は自由労働との対比で議論された。共和主義的見解によれば、自由労働とは「市民を自己統治にふさわしいものとする人格的資質を養うような条件下で行われる労働のこと」(サンデル 2011a, 60)であり、独立自営農民の労働がその典型であるが、生産手段を持つ職人、熟練工、機械工の労働も自由労働であると考えられた。親方職人の下で働いていた職工や徒弟は独立へ至る一時的な段階であって、自由労働のシステムと矛盾しなかった。しかし、「ヨーロッパにおける無産階級のように、雇用者によって支払われる賃金でなんとか暮らしていかなければならないような人々は、自由な市民として自ら判断するための道徳的・政治的自立性を欠きがち」(60)であり、そのような労働は共和主義的見地からすれば自由労働とはいえないのであった。労働運動の指導者は、「共和主義的公民性にとって欠かせない経済的・政治的独立を彼らに与えないという意味において」(63-64)賃労働を賃金奴隷と呼んだ。19世紀後半になっても「先導的な労働者組織」は「賃労働制度を廃止すること」を目的とした(80)。労働時間の短縮も「労働者の道徳的・公民的性格を改善するであろう」(87)がために推

3 例えば、Nussbaum (1990)、ヌスbaum (2005, 16)、松井 (2012, 52-53)、参照。また、アリストテレスとマルクスの関係については、内田 (2018)、参照。

4 例えば、マルクス (1935, 113)。

進されたのであった。

このような19世紀後半までのアメリカの自由労働対賃労働の議論は、マルクスの疎外された労働論と重なる部分があり、興味深いものである。この議論にはアメリカの奴隷制に対する評価が深く関わっていることから、恐らく奴隷制を強く意識していたマルクスの賃労働論にも影響を及ぼしていたであろうと推察される。いずれにしても、市民の政治参加を重視するサンデルの立場から見ても、賃労働は疎外された労働であり、資本—賃労働関係は労働者の市民としての徳性を涵養せず、逆にむしろ労働者の人間性を貶めているがゆえに腐敗している、ということになる。疎外と腐敗は、様々な社会関係をアリストテレス的目的論の見地から批判する際に有用な批判語であるといえる。

とはいえ、もちろん疎外と腐敗は異なる概念である。両者とも同一の問題状況を批判的に指摘する語であるが、機能領域の階層に違いがあるといえる。例えば、サンデルはアンダーソンによる代理出産批判を敷衍しつつ、次のように述べている。すなわち、出産の本来の目的は母と子の感情的絆であるにもかかわらず、代理出産は「彼女をその目的から遠ざけてしまうからこそ、人を貶めるものなのだ」(サンデル 2011b, 160) と。この文は、疎外および腐敗という語を用いるならば、次のように言い換えられるであろう。すなわち、代理出産は母と子の絆を疎外するからこそ腐敗している、と。ここでは、まず母子関係の疎外という事実が存在し、そうであるが故に、腐敗という評価が下される。疎外は1つの事実関係であり、その事実関係の性格に応じて価値判断が行われ、その判断の1つが腐敗である、ということができると思われる。

一般に、何らかの現象に対してわれわれが疎外という語を当てはめるとき、そこには負の価値判断も含まれているとはいえ、第一に意図されているのは一定の事実の指摘である。例えば賃労働と代理出産について、疎外論の見地からは、労働生産物が労働者から、子供が生みの母から疎遠なものとなり、これに応じて労働自体が労働者から、出産行為が生母から疎遠なものとなっているという事実が指摘されることになる。その上で、このような事実は、目的論ないし本質主義的立場から見れば本来性の喪失であって、負の評価が下される。そして、この負の評価を最も鮮明に表現してくれる用語が腐敗であるといえる。

腐敗という語が用いられる場合、主たる意図はその現象に対して負の烙印を押すことにある。腐敗 corruption は単に道徳上望ましくないだけでなく、贈収賄という犯罪を連想させるため、批判に含まれる倫理的非難の度合いは極めて高いといえる。マルクスの疎外論も資本主義的社会関係の倫理的批判という側面を持つが、サンデルの腐敗論はこの関係のより徹底した倫理道徳的な批判となる。

また、マルクスの疎外論とサンデルの腐敗論には次のような相違もある。前者は、人間の疎外からの解放は社会体制全体の歴史的変革によって実現されるとする全体論的理論であるのに対し、後者は様々な具体的事例を取り上げ、それをその事柄の本質ないし目的に即して検討し批判するという個別的議論の集成である。前者は、疎外の歴史的必然性といった長大な時間幅の中で



立論されているが、後者は現時点での腐敗の除去撲滅を即座に求めるものである。疎外論と腐敗論のこのような相違は、両者の間に相補性があることを意味しているように思われ、後者を前者の体系の中に取り込んでみたいという欲求を刺激するものである。しかし、サンデルの腐敗論の魅力は、むしろこの個別性、具体性、現在性、即刻性にあると思われる。次項では腐敗という語の批判語としての意義をもう少し立ち入って考察したい。

### 3. 環境経済学批判

サンデルは、インセンティブを与えるために人々に支給される報奨金や人々から徴収される罰金がそれまで守られていた倫理道徳を押し出してしまい、人々の活動や社会的慣行を腐敗させると述べている。腐敗 *corruption* という語は贈収賄という意味を持つため、このような報奨金や補助金、罰金や課税等による市場化を批判する際、効果的に機能するように思われる。

サンデル (2014) は「インセンティブ」と題した章の冒頭で、不妊手術を受けた薬物中毒の女性に 300 ドルを支払っているある慈善団体のインセンティブ方式を取り上げ、これを腐敗だとして批判している (68-74)。サンデルによれば、この慈善団体は薬物中毒の女性を「障害のある赤ん坊の製造装置として扱い」、女性の方も自分の生殖能力を「金銭的利益を得るための道具として扱っている」(73)。両者とも生殖能力を誤った方法で評価しているのであって、この 300 ドルは一種の賄賂なのである。疎外論の見地から見ても、女性が金銭を受け取る代わりに不妊手術を受けることは、自分の身体の手外であり本来性の喪失であるといえるが、しかしそれ以上にこの行為は、人間の身体に関わる規範の腐敗として道徳的に批判されるのが適切であるように思われる。

この典型的な腐敗事例から始めてサンデルは、良好な学業成績や薬を服用することに対する報奨金の支給など様々なインセンティブ方式を取り上げている。その中でも経済学批判という点で特に興味深いのは、環境経済学の授業で教授される環境政策の経済的手法に対する批判である。サンデルによれば、1970 年代はじめに実施された政府による直接規制には環境汚染に対する道徳的非難が含まれていたのに対し、1980 年代以降に現れた市場ベースの政策は環境保全のために必要とされる環境倫理をむしろ蝕んでしまう傾向を持つ。環境税は「税額が十分であれば、汚染者に損害の代価を負わせるという長所がある」(サンデル 2014, 112) とはいえ、高率の課税は実施するのが政治的に難しい。税率が低ければ、環境税は罰金ではなく料金という性格を持ち、料金を支払うことによって排出量を増加させるという行為を防げない。一方、より導入しやすいのは排出権取引であるが、これにも道徳的な問題がある。「富裕な国々がお金を払って浪費的な習慣を大きく変えずにすませるのを認めれば」(114)、自然に対する不適切な姿勢、「自然は経済的余裕のある人のためのゴミ捨て場だという姿勢」(114) を助長してしまうとともに、環境倫理に必要な「犠牲の共有という精神が蝕まれ」(114) てしまう。

このサンデルの「犠牲の共有」という概念はコミュニタリアンである彼の議論の目立った特徴

であるが、この概念を論拠とする批判は、われわれに湾岸戦争時の日本の経験を思い起こさせるものがある。1991年の湾岸戦争時、日本は多国籍軍に多額の資金援助をしたにもかかわらず、人的貢献をしなかったことから、終戦後のクウェートの感謝広告に日本の国名は載らなかった。もちろん、だからといって日本も実戦で血を流すべきであったということはできないが、それでもやはり安全な場所にいた人々が戦争に対して大金を支払ったという事実には重みがある。こうした行為に対して道徳的腐敗の徴候を指摘する人がいた場合、この批判を完全に否定し去るのは困難であるように思われる。今後、仮に日本が排出権の購入だけで気候変動対策を済ませるようなことがあれば、国際社会で尊敬されないだけでなく、環境倫理の腐敗を指摘されることになる、ということはある話である。

倫理の腐敗ということでは、トロフィーハンティングの事例が特に印象深く語られている（サンデル 2014, 119-122）。これは、野生動物を保護するために絶滅危惧種の狩猟を市場化するという一種のエコ・ツーリズムである。すなわち、絶滅危惧種のクロサイを市場化すれば、牧場主にはクロサイおよびその繁殖のための自然環境を保全する経済的動機が生じ、土地が農業や牧畜に転用されて自然が失われるのを防ぐことができる、というものである。アフリカでのこのようなハンティングの市場化は、環境経済政策の成功事例として環境経済学の入門書にも取り上げられている（ヒール 2005, 100-110）。すなわち、裕福なハンターが大金を支払って野生動物、例えばヒョウを仕留めて満足する。この大金は運営者の利益になるとともに野生動物の生息環境を維持するために、また野生動物を補充するために使われる。また、ハンターは宿泊や交通、飲食等にも支払いをするので、観光関連産業が興る。これにより、その土地の人々は、農業や牧畜によって野生動物の生息域を破壊するのではなく、野生動物を増やしながら生活していける。一部の動物、例えば個々のヒョウはハンターに殺されることになるが、しかしこの犠牲によってヒョウの個体数はむしろ増加する。「ヒョウにとってもそれは悪い取引ではないだろう」（104）というものである。経済学の功利主義的価値基準からすれば、経済的厚生が十分に達成された成功例ということになるのであろう。

しかしながらこのトロフィーハンティング市場は、娯楽のためにクロサイやヒョウを殺すという行為に依存するものである。動物を直接殺害するのはハンターだが、この動物種の保存と繁殖に携わっている人々の目的も、直接的にはハンティングであって、ハンターに殺害してもらうために動物を生かしているに過ぎない。動物とはいえ、これを娯楽で殺害する行為に倫理道徳的な問題はないのであろうか。もちろん人間社会はトロフィーハンティング以外にも日々大量の動物を殺しているが、その目的は食料や日用品や医薬品等の生産によって生活の必要を満たすことにある。また、農作物を守るというやむを得ない理由によるものである。これに対して、トロフィーハンティングは娯楽のために動物を殺す行為であり、サンデルが述べているように、その倫理的適切性については議論の余地が大いにある。例えば、日本の伝統的な倫理道徳の基礎の1つとなってきた仏教の見地からすれば、娯楽としての殺生に肯定的な要素を見出すことは全くで

きないであろう。この見地からは、このような非倫理的行為によって利益を上げる事業は腐敗しており、このような市場を推奨する環境経済学者も腐敗しており、このような事業を政府が支援するとすれば、政府も腐敗しているという評価にしかならないであろう。環境経済学の役割は環境問題を解決するための効率的な政策手段を提供することにあるが、この効率性至上主義は、これまで受け継がれてきた倫理や道徳、とりわけ非功利主義的な倫理を毀損してしまう傾向がある。この点が、サンドルの環境経済学批判の要点であると思われる。

もともと、環境経済学は倫理を軽視する傾向を持つといえる。岩田規久男の「環境倫理主義批判」(1997)は、主流派経済学のこの反倫理主義的性格を最も露骨に表明した論考の1つとして貴重な文献である。岩田は、ごみ収集の有料化、デポジット制、環境税といった経済的インセンティブ手段の有効性を説明した後、環境教育の必要性について言及しているが、それは「環境教育が重要なのはそのような制度改革へのインセンティブを与えるためであって、環境倫理を高めるためではない」(81)というものである。岩田によれば、「環境倫理を高めることによって、人々のライフスタイルを環境に優しいものに変えることができる」という主張は、「環境倫理主義運動ともいうべき一種の信仰」(76)であって、「地球環境を保全するためには、『環境倫理を高める』よりも、『エネルギー価格を高める』政策の方がはるかに強力である」(74)のである。このような主張の実証的根拠の1つとして岩田が持ち出しているのは、1人当たり二酸化炭素排出量の日独比較である。すなわち、ドイツは環境意識の高い国として有名で、「ドイツの方が日本人よりも環境倫理が高い」(71)という研究もあるが、1988年の1人当たりの二酸化炭素排出量を見ると、「日本はイタリアに次いで2番目に低い国」(72)になっており「環境倫理のもっとも高いとされる西ドイツやオランダは、日本のそれぞれ、1.4倍と1.9倍という高さである」(72)。ドイツの環境倫理の高さは省エネ・省資源技術の発展に寄与していない、というのである。

しかし、その後の1人当たり二酸化炭素排出量(単位:t-CO<sub>2</sub>/人)の推移を見てみると<sup>5</sup>、ドイツは1990年が11.9、1995年10.5、2000年10.0、2005年9.67と一貫して減少しているのに対し、日本は1990年8.42、1995年8.83、2000年9.00、2005年9.22と一貫して増加している。そして2011年にドイツの排出量は日本のそれを下回るようになり、2014年でもドイツ8.93に対し日本は9.35となっている。2011年の福島原発事故の影響を考慮しなければならないとはいえ、以上のような数字の推移は、二酸化炭素の排出削減のために環境倫理教育は不要であるという見解を支持するものではないように思われる。むしろ、環境倫理の高さが、二酸化炭素排出量削減のために寄与する部分があったと解するのが自然であろう。もちろん、エネルギー価格の高騰が排出量の削減に強力に作用することは明らかである。しかしそれは、環境倫理に基づく意図的な行為が環境問題の解決に無力だということを示しているわけではない。

5 環境省大臣官房環境計画課企画調査室/編『平成29年版環境統計集』41ページ。



確かに、環境倫理学の議論の中には経済の現実を脇に置いた過度に理想主義的な主張もしばしば見られる。その一方、環境経済学が推奨する経済的インセンティブの付与は、環境問題に全く無関心な人々をも環境問題の解決に貢献させることを可能にする点で明らかに優れているといえる。とはいえ、経済的インセンティブがあまりに強調されると、人々を過度に利己的な行動へと促し、地域での人々の共同生活を不快なものにする可能性がある。例えば岩田（1997）は「ゴミの減量化手段」として「ゴミ収集の有料化」を推奨しているが、それは当時伊達市や高山市で実施されていた低料金の有料化ではなく、不法投棄が「無視できない量になると予想される」（77）程度の高額な有料化である。これによって生じる不法投棄に対しては、「それを厳しく罰することが必要」（77）であり、有料化は「厳しい罰則が伴えば、ゴミの減量化手段として、有力な手段である」（77）というのである。これは、高額な料金を課すことで人々を不法投棄へと追い込み、この不法行為を厳しく罰することで人々にゴミの減量化を余儀なくさせるというもので、かなり高圧的な手法であるといわなければならない。有料化による負担感が重くなる低所得者に対してはとりわけ過酷に作用するものである。こうした鞭打ち的な手法を奨励する見解には、人間に対する一つの独特な認識が現れているように思われる。すなわち、大多数の人間は倫理道徳的に行動する存在である以上に、一定の刺激に対して特定の行動を示す実験室のマウスのような習性を持つ存在であり、その際に刺激となるのは料金や罰金のような金銭だ、という認識である。金銭的インセンティブの有効性を強調する経済学者は、多かれ少なかれこのような認識を共有しているものと推察される。

とはいえ、金銭的刺激に応じて右往左往するという人間観は、主流派経済学に固有の認識というわけではない。というのも、マルクスの疎外論も市民社会の成員を金銭的利益を求めて利己的に行動するエゴイストとして描いているからである。すなわちマルクス（2014）によれば「市民社会は、人間が類としてそなえているすべての絆を引き裂き、こうした絆の代わりにエゴイズムと利己的な欲求を提示し、人間の世界をたがいに敵対する原子としての個人の世界に解体する」（85）。そこでは「人間は他人を手段とみなし、自分自身も手段に身を落とし、疎遠な力に翻弄されている」（31）。人間がこのような存在であるならば、金銭的インセンティブによって公共心ではなく利己心に働きかけ、意図せざる帰結としてゴミ減量化等の環境改善を導こうとする環境経済学の提案は極めて合理的であるということになる。

とはいえ、もちろんマルクスの疎外論が主張しているのは、エゴイストに金銭的インセンティブを与えて、よりエゴイスティックに行動するよう促すということではない。近代社会は「人間を一方では市民社会の一員に、すなわち利己的に独立した個人に還元」し、他方では人間を「国家の公民に、すなわち道徳的な人格に還元する」が、この二重性は回復されるべき疎外された状態であって、「現実の個人一人一人が、抽象的な公民を自己のうちにとり戻す」ことが必要だ、と主張するのが疎外論である（マルクス 2014, 69）。つまり、そこでは経済活動を営む個人が同時に「道徳的な人格」でもある必要が主張されているのであり、経済学の市場主義とは方向性が

全く逆なのである。後者は、市民社会の人間をマウスのような存在とみなし、これを経済的インセンティブによって操作しようとするが、前者はこの人間が自己を統治する公民であるべきだと言っているのである。

近代社会では、人間は類的本質としての共同性から疎外され利己的に行動する傾向を持つが、現代の市場主義的な環境経済学は、新しい市場を作り出すことによってこの疎外をより一層推し進めようとする。それは利他的行動を排除しつつ利己的行動を押し広げ、この利己的行動を一定の目的へと向けて操作しようとする。サンデルの経済学批判は、現代社会の様々な領域に侵入してくる経済学の人心操縦的論理の悪影響から人間の本質としての共同性または公民性を守ろうとするものであり、疎外論の見地から見てもごく妥当な議論であるといえる。

#### 4. 疎外論と腐敗論についての若干の懸念

すでに見たように、サンデルの腐敗論とマルクスの疎外論は、アリストテレスに由来する本質主義の立場から立論されている。小林 (2013) は、サンデルの正義論を『『目的論的正義』ないし『完成主義的正義』』(89) と規定しているが、この規定はマルクスの疎外論にも当てはまるものであって、疎外論は完成主義 (perfectionism) ないし卓越主義 (perfectionism) 的である。

卓越主義は物事の目的ないし本質を提示し、この本質の実現を善とみなす。その際、本質には何らかの理想が含まれており、この理想がどの程度の水準に設定されているかによって、卓越主義の性格も異なってくる。ロールズ (2010) は、卓越主義の代表としてニーチェとアリストテレスを挙げ、ニーチェがゲーテのような偉人の生活に与えている「絶対的な重みづけは尋常ではない」と述べる一方で、アリストテレスのそれは「より穏健である」と評価している (431)。しかし、アリストテレスの人間性についての要求水準も決して低いものではなく、それゆえこの立場を受け継ぐマルクスの疎外論とサンデルの腐敗論もその土台には人間についての高い理想がある。もちろん、このような理想主義は疎外論と腐敗論の長所と魅力の源であるといえるが、しかし一方で、理想の過度な追求は時に差別的な議論に通じることがあり、マルクスとサンデルの卓越主義もこの懸念を免れているわけではないように思われる。以下では、この若干の懸念について考察を加えておきたい。

マルクスの疎外論において、人間は類的存在と規定され、その概念内容は二つの側面を持つ。まず、人間は共同的存在であり、他者に対して利他的に振舞うのが本来の姿である。また、人間は自由で意識的な存在であり、生産活動において、他の動物とは異なって肉体的欲求から自由である。したがって人間は普遍的に生産し、美の法則に従っても生産し、全自然を再生産する。沢田 (2006) によれば、類的存在としての人間は『『神』のごときものともいえる』(10) 存在である。

このような人間の本質規定と比べ合わせて現実の人間を見るならば、市場での人間の商行為と工場での労働者の労働は、人間性の本来の在り方から頹落したものとして現れる。市場での人間

は利己的に行動するエゴイストであり、労働者は動物的な存在になってしまっている。つまり現実の人間は類的存在から疎外されているのである。かつてアリストテレス（2001）は、商業と金融業を反自然的な行為として否定し（36）、職人労働や「賃金を支払われる作業」を「精神から閑暇を奪い、劣悪なものにする」ゆえに卑俗なものと位置づけた（406）。アリストテレスにとって幸福とは徳の行使であるが、商人や高利貸しや職人は、その職業上、徳を身に付けることができないため、幸福には与りえず、国政に携わることもできない。マルクスの疎外論はこのような思想の延長線上にあるといえる。

アリストテレスの卓越主義は奴隷制を肯定する議論へと通ずることになったが、マルクスの疎外論も、エゴイズムを批判するあまりユダヤ人の行為をあくどい商売と決めつけ、ユダヤ人差別と接するところまで進んでいる箇所がある<sup>6</sup>。また、労働疎外論は労働者の生活を動物的であると断じている。これは、労働者が「ただわずかに彼の動物的な諸機能、食うこと、飲むこと、産むこと、さらにせいぜい、住むことや着ることなどにおいてのみ、自発的に行動していると感じずる」（マルクス 1964、92）だけで、労働においては自発的に行動していないからだが、ここには動物と肉体労働者を等置し、その生活を眼下に見るアリストテレス的なエリート主義の一端が現れているように思われる。

サンデル（2011）は、マルクスよりも更に具体的な事例を用いて、人間の本質と労働との関係を次のように論じている。

たとえば、鶏肉加工場で長時間流れ作業をするような、反復的で危険な仕事を考えてみよう。このような労働形態は正義にかなうだろうか、正義にもとるだろうか。

リバタリアンにとっては、労働者が労働と賃金を自由に交換したかどうかが決め手だ。自由に交換していれば、その労働は正義にかなう。ロールズにとって、そうしたやりとりが正義にかなうのは、労働の自由な交換が公正な条件の下に行なわれた場合だけだ。アリストテレスにとっては、公正な条件の下の合意でさえ、不十分である。労働が正義にかなうためには、その労働をする人の本性に適したものでなければならない。そうした条件を満たさない仕事もある。きわめて危険だったり、反復的だったり、やりがいがいなかったりして、人間性を欠くような仕事のことだ。その場合、正義のために、労働の内容を人間の本性に合うように組み立て直すことが必要だ。そうしなければ、その労働は奴隷制と同様に正義にもとるのである。（320–21）

ここでサンデルが取り上げている鶏肉加工場の労働は、その危険性と反復性が強調されていることから、恐らく、ナイフを用いて鶏を様々な部分に切り分けていく解体や加工の作業のことで

---

6 山口（2016）参照。

あると思われる。このような労働も、リバタリアンの見地からは、労働力の売買が自由な市場で行われている限り正義に適っていると判断される。一方、ロールズの見地からは、おそらく正義の2原理、特に格差原理が実現されている必要があるであろうから、鶏肉加工労働が正義に適うためには、労働力市場は社会保障が完備された平等主義的な環境の中にある必要があると思われる<sup>7</sup>。しかし、サンデルの要求水準はもっと高い。鶏肉加工労働は、サンデルの見地からすると、生産関係の側面をどのように改善したところで、労働過程そのものを「組み立て直」さないかぎり、正義に適うことはない。なぜならそれは危険で反復的な作業だからである。

サンデルのこの議論には、アリストテレス的人間本質論の特徴がよく表れているといえる。ロールズ(2010)によれば、人間は自分が持つ能力の行使を楽しむ存在であるが、その際、人間は単純な活動よりも複雑な活動の方を好む(557-569)。この人間の傾向性をロールズはアリストテレス的原理と名付けている。この原理は、単純労働よりも複雑労働の方を高く評価する労働力市場での事実とも合致していて、正しいことを言い当てているように見える。しかし、アリストテレスの原理は、ロールズのリベラリズムの枠の中では有効に機能する原理であると思われるが、卓越主義の枠の中ではやはり差別的な議論に帰着する恐れがある。リベラリズムにおいては、鶏肉加工労働の世界の中で鶏肉加工能力の卓越性が評価されるのであって、鶏肉加工労働と他の業種の労働が比較され順位付けされることはない。これに対してアリストテレスの卓越主義においては、自由人にとって望ましい活動は哲学と政治であり、農業ですら決して望ましい活動とはいえず、職人労働や賃労働は自由人が行うべき活動ではない。この人間活動の種類別の順位付けは、肉体労働を奴隷的と見なし、奴隷制を肯定した本性的奴隷論につながる議論である。サンデルの共和主義的見解においても、労働についての価値判断の基準は自己統治の能力に置かれており、「市民を自己統治にふさわしいものとする人格的資質を養うような条件下で行われる労働」(2011a, 60)が望ましい労働として評価される。サンデルは、独立自営の農民や職人の労働を肯定しているが、大規模な工場での賃労働には否定的であるように見える。そして上掲引用文の議論は、鶏肉加工労働は賃労働の中でも特に望ましくないかのような印象を与えるものとなっている。卓越主義的な人間観に基づくかぎり、人間が従事する種々の活動について、その望ましさの評価が行われるのは避けられないことであるといえる。

マルクスの労働疎外論も自己目的としての活動に価値を置く卓越主義的な人間観に基づいている。とはいえ、サンデルとマルクスの労働論には大きな相違もある。すなわち、サンデルが強制と腐敗の相違を強く意識しつつ後者を重視しているのに対し、マルクスは強制を重視しつつ強制批判の枠の中で疎外について語っているという点がそれである。

すでに見たように、サンデルによれば、強制、公平性、エクスプロイトーションに対する批判はリベラリズムが重視する立場であって、サンデル自身は腐敗を重視する立場に立つ。強制のな

7 ロールズとサンデルの労働観については、福間(2014)参照。



いところにも腐敗はあり、それは非難されなければならないからである。例えば彼は次のように述べている。

売春はセックスに対する間違った態度を反映し、助長する一種の腐敗である。侮辱という観点からのこの異論は、同意に瑕疵があることを根拠にしているわけではない。貧困のない社会であっても、その仕事を好み、自由意志でそれを選択する高級売春婦の場合でさえも、売春を非難するのである。(2014, 164)

サンデルがいう腐敗とは、何かを誤った方法で評価すること、不適切な規範に従って扱うことであった。売春はセックスを貨幣で評価し売買することだが、このような行為は、物理的強制はもちろんのこと、経済的強制あるいは事実上の強制すらないところでもなされる。そして、完全な自由意志で行われた取引であっても、売春は腐敗であって、非難の対象となる。これがサンデルの見解であると思われる。

しかし、現状では、売春の背景には強制や不平等が実際にあり、自由意志に見える売春も性差別的な環境や選択肢の過少、極めて魅惑的な報酬等による場合が少なくないと考えられる<sup>8</sup>。少なくともアメリカや日本は「貧困のない社会」ではない。そのような中で売春の本性的腐敗性を強調し、売春に改めて汚名を着せることは、売春婦に対する差別をより深いものにする懸念がある。サンデルは、腐敗を強制から区別する同様の論理を、さらに鶏肉加工労働のような危険で反復的な労働にも適用しているが、このような議論はその種の職業に対する差別的な見方を助長してしまう懸念があると思われる。

一方、マルクスの労働疎外論は、疎外を強制から区別するものではなく、むしろ賃労働の強制労働としての性格を強調する議論である。人間を類的存在と規定する本質主義的ないし卓越主義的な論述は、「人間からの人間の疎外」としての疎外の第4規定を導き出す役割を果たしている。自由な意識的活動としての類的本質が労働者から疎外されているのは、労働者の活動が「他人の支配下にあり、他人に強制され拘束される活動となっている」(マルクス 2010, 107) からである。賃金労働者の労働が事実上強制労働であること、したがって労働者は事実上奴隷状態に置かれていること、こうした不公正な生産関係の非本来性を労働者の側から本質主義的に分析したのが労働疎外論であるといえる。

労働疎外論は強制労働を人間の本質に遡って内面的に分析した点で独自の意義があると思われる。しかし、後の『資本論』においては疎外という概念はほとんど使用されていない。代わりに類出するのがエクスプロイトーションないし搾取である。疎外と搾取は資本主義的生産関係の非

8 売春の強制性についての様々な見解については、Yuracko (2003) 参照。同書では seductive offers による売春の選択を強制ではないものとして解釈しているが (64-75)、疑問である。不平等な社会では、むしろ強制の1形態と解すべきであると思われる。



倫理性を示す2つの基本概念であるが、労働に関するかぎり、疎外論の内容は『資本論』では搾取論に包摂され、エクスプロイトーションの概念の枠の中で、すなわち、強制労働、奴隷的状态、不平等という明確に「公正」の系列に連なる倫理的枠組みの中で論述されている。資本家による労働者の搾取によって、一方の側には剰余価値が積み上がるが、他方の側では人間の本質の実現が阻害される。強制労働は人間の本質の実現の阻害を意味するが故に廃絶されなければならない。労働疎外論の内容は、労働力のエクスプロイトーションによって労働者の側にもたらされた被害の実態の描写として、『資本論』第1巻の多くのページに現れている。

このように、マルクスのアリストテレス的な本質主義ないし卓越主義は、強制労働の非人間性を批判するための倫理思想として機能しているのであって、自発的に行われる生産活動について、その活動の倫理的価値を問うものとはなっていない。マルクスの経済学批判においては、強制労働批判から区別された純粹に卓越主義的な見地からの労働論は、人間による人間のエクスプロイトーションが廃絶された後に問われるであろう論点であって、現在の資本主義的階級社会のなかでは強調する必要のない議論なのである<sup>9</sup>。

## おわりに

マルクスの疎外概念とサンデルの腐敗概念は共通する倫理思想に基づいており、重なり合う部分を持つが、重要な所で異なっている。麻薬中毒問題への金銭的インセンティブの導入や環境問題への市場主義的対応といった現代的な問題領域においては、後者が批判のための概念として、前者の趣旨を再現しつつ、より有効に機能し得るといえる。一方、古くからある労働問題においては、腐敗の概念を「強制」や「公正」と区別して独立に使用することは必ずしも適切であるとはいえない。サンデルはリベラリズムを批判するあまり、腐敗概念の独自の意義を強調し、「強制」の要素を軽視する傾向があるように思われる。しかし、こと労働問題においては、この傾向はあまり良い結果をもたらさない。この領域においては、やはり「搾取」と連携する疎外の概念が今もなお有効であると考えられる。

### 引用・参考文献

- 青木孝平 (2008), 『コミュニタリアン・マルクス—資本主義批判の方向転換』 社会評論社。  
 アリストテレス (2001), 『政治学』 牛田徳子訳, 京都大学学術出版会。  
 岩田規久男 (1997), 「環境倫理主義批判」『環境倫理と市場経済』 環境経済・政策学会編, 東洋経済新報社, 69-81 ページ。  
 沢田幸治 (2006), 「マルクスの「類=類的存在」概念について」 神奈川大学経済学会『商経論叢』 第42巻 第3号, 1-12 ページ。

9 マルクスの卓越主義については、松井 (2012), 参照。そこでは次のように述べられている。「社会主義社会から共産主義社会へと至る段階で、万人の物質的な欲望がある程度満たされることによって、真の善き生とは何かという課題が社会全体の討議の対象となり、人々が自由に卓越性を追求することが可能になる。」 (306)

- 内田弘 (2018), 「『資本論』の原始的再帰関数—アリストテレス難問のマルクス解法—」専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第52号, 25-58ページ。
- 環境省大臣官房環境計画課企画調査室/編『平成29年版環境統計集』  
Accessed January 7, 2019  
[https://www.env.go.jp/doc/toukei/contents/pdfdata/h29/2017\\_all.pdf](https://www.env.go.jp/doc/toukei/contents/pdfdata/h29/2017_all.pdf)
- 小林正弥 (2013), 「マイケル・サンデルとリベラル—コミュニタリアン論争」菊池理夫・小林正弥編著『コミュニタリアニズムの世界』勁草書房, 13-110ページ。
- ヒール, ジェフリー (2005), 『はじめての環境経済学』細田衛士, 大沼あゆみ, 赤尾健一訳, 東洋経済新報社。Heal, Geoffrey. 2000. *Nature and the Marketplace: Capturing the Value of Ecosystem Services*, Washington, DC: Island Press.
- サンデル, マイケル・J (2011a), 『民主政の不満—公共哲学を求めるアメリカ (下) 公民性の政治経済』小林正弥監訳, 勁草書房。Sandel, Michael J. 1996. *Democracy's Discontent: America in Search of a Public Philosophy*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- サンデル, マイケル (2011b), 『これからの「正義」の話をしよう—いまを生き延びるための哲学』鬼澤忍訳, 早川書房。Sandel, Michael J. 2009. *Justice: What's the Right Thing to Do?* New York: Farrar, Straus and Giroux.
- サンデル, マイケル (2014), 『それをお金で買いますか—市場主義の限界』鬼澤忍訳, 早川書房。Sandel, Michael J. 2012. *What Money Can't Buy: The Moral Limits of Markets*, New York: Farrar, Straus and Giroux.
- ヌスバウム, マーサ C. (2005), 『女性と人間開発—潜在能力アプローチ』池本幸生, 田口さつき, 坪井ひろみ訳, 岩波書店。
- 福間聡 (2014), 『『格差の時代』の労働論』現代書館。
- 松井暁 (2012), 『自由主義と社会主義の規範理論—価値理念のマルクスの分析』大月書店。
- マルクス, カール (1935), 『賃銀・価格および利潤』長谷部文雄訳, 岩波文庫。
- マルクス (1964), 『経済学・哲学草稿』城塚登, 田中吉六訳, 岩波文庫。Marx, Karl, and Friedrich Engels. 1985. *Werke. Band 40*. Berlin: Dietz Verlag. 465-588.
- マルクス (2010), 『経済学・哲学草稿』長谷川宏訳, 光文社古典新訳文庫。
- マルクス (2014), 『ユダヤ人問題に寄せて／ヘーゲル法哲学批判序説』中山元訳, 光文社古典新訳文庫。Marx, Karl, and Friedrich Engels. 1956. *Werke. Band 1*. Berlin: Dietz Verlag. 347-391.
- マンキュー, N・グレゴリー (2014), 『マンキュー入門経済学 (第2版)』足立英之, 石川城太, 小川英治, 地主敏樹, 中馬宏之, 柳川隆訳, 東洋経済新報社。Mankiw, N. Gregory. 2012, 2009. *Principles of Economics. Sixth Edition*. Mason: South-Western Cengage Learning.
- 山口拓美 (2016), 「類的存在論の一側面について」神奈川大学経済学会『商経論叢』第51巻第4号, 153-168ページ。
- ロールズ, ジョン (2010), 『正義論 改訂版』川本隆史, 福間聡, 神島裕子訳, 紀伊國屋書店。Rawls, John. 1999. *A Theory of Justice, Revised Edition*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Nussbaum, Martha. 1990. "Aristotelian Social Democracy". In *Liberalism and the Good*. Edited by R. Bruce Douglass, Gerald M. Mara, and Henry S. Richardson. 203-252. New York: Routledge.
- Yuracko, Kimberly A. 2003. *Perfectionism and Contemporary Feminist Values*. Bloomington: Indiana University Press.